



飛騨市

Facebook 公式アカウント

飛騨市役所



まちの話題に掲載しきれないイベントや写真は市の公式 Facebook で配信中。

まちの話題  
いろいろ

12/3

## 33年間にわたり地域の人々を支えた功績が認められる 神岡町の清水利子さんが瑞宝単光章を受章

秋の叙勲において、神岡町森茂の元民生委員・児童委員の清水利子さんが瑞宝単光章を受章され、12月3日に、受章の喜びを都竹市長に報告しました。

清水さんは、昭和61年12月1日から民生委員・児童委員を務められ、令和元年11月30日の任期満了までの33年にわたって地域の人たちを支えました。地元の神岡町山村地区を中心に活動され、生活困窮世帯、高齢者、ひとり親家庭など多様な方々に対し、関係機関と連携・連絡を密にとりながら相談に応じてきたことなどが認められました。

清水さんは、これまでを振り返り、地域の変化や会議・出張などの際のご苦労とともに、支えてくださったご家族、地域の方々への感謝の思いを話されました。

都竹市長は「叙勲を受けるのは大変名誉なこと。33年間ありがとうございました」とお祝いを述べました。



12/4

## 市内の企業や団体で働くベトナム人の若者らが参加 市内で働く外国人材同士の交流を深める

カメラ 特レポ

市内で働く「外国人材交流会」が古川町で開かれ、参加者は近況を話し合ったり、木工のワークショップや街歩きを楽しみながら互いに親交を深めました。

今回は建設業や製造業、農家、福祉施設など5カ所の企業・団体で働くベトナム人の若者16人が参加しました。

参加者は、覚えたての日本語で一生涯懸命に自己紹介をした後、2グループに分かれ、県多文化共生推進員の岩塚久美子さん（古川町）のガイドで古い街並みを散策し、観光案内所やまつり会館などを見学して地域の暮らしや文化を学びました。まちづくり拠点nodeでは、寄せ木細工のキーホルダー作りを体験しました。終了後、参加者は「いろいろな文化が分かり、体験もできてよかった」「古川祭の映画が楽しかった。ありがとうございました」などと一人ひとり感想を述べていました。



12/5

## 大正大学の学生が飛騨市でフィールドワーク 格的な研究開始を前に1、2年生が実践的な学び体験

飛騨市と連携協定を締結している大正大学の地域創生学部が、2日間にわたり市内でフィールドワークを行いました。この企画は、「市民一人ひとりが自分らしく活躍できるまちづくりとは」をテーマに、これから本格的な研究活動を迎える1、2年生に実践的な学びを体験してもらおうと、飛騨市出身で同学部3年の坂下拓夢さんが考えたものです。

初日には古川町公民館で、地元住民4人から話を聞きながら交流。2日目の午前には、都竹市長の案内で飛騨古川まつり会館や瀬戸川治いなど古川町市街地を巡りました。

参加した同学部1年の岩崎華映さんは「のんびりとした雰囲気町の並みが良かった。行政に直接かかわる市長さんから話を聞くことができ、今後の研究に向けて参考になりました」「ロケツურიリズムの経験がある方から話を聞いて、有意義な時間を過ごせました」と感想を話していました。



## 12/6 消防団活動への理解を深め、活動の活性化はかる

消防団への理解を深めて入団を促すため、市では消防団活動に協力する市内の事業所に「消防団員募集」と表記したマグネットシートを贈りました。事業所の車両などに貼ってもらい、入団の促進と協力事業所のPRを図ります。

飛騨市消防団は市内の約830人が団員となっており、消防や水防などの活動に取り組んでいます。仕事を持ちながら務める団員が多いことから、消防団への関心を高めて活動の活性化を図ろうと、消防団協力事業所の認定制度を設け、市内の90事業所を認定しています。

この日は、同事業所の中で市内で最多となる22人の消防団員が働くアルプス薬品工業(株)(古川町)の瀬木幾部長と、消防団員の雇用率が40%(20人中8人が消防団員)で最も高い協業組合高登建設(河合町)の中屋英明代表理事に対し、都竹市長がシートを手渡しました。



## 12/9 稲の刈り取り適期や鳥獣害の防止策について

KDDIと飛騨市が連携して進めているスマート農業実証実験についての令和3年度報告会が行われました。この日は、実証実験に協力している市内の農業者7人などが参加し、実証実験の成果を聞いたり意見交換をしました。

今年度は、稲の刈り取り適期を探る調査と、鳥獣害の防止などをテーマにした研究を実施。同社の担当者が研究結果についてのまとめを報告しました。

スマート農業での米栽培に協力している(有)エイドスタッフ代表の田中一男さんは「基盤整備が進み、農地集約が進んで広い農地になれば、こうした機器の利点を生かして効果も出てくるのでは」と話してみえました。野村久徳農林部長は「後継者不足が続く中、ベテランの勘に頼っている技術を数値などで見える化し、次世代へ引き継いでいくことが大切と考えます」と話していました。



## 12/10 石臼で挽いてきな粉作り、おはぎを作って舌つづみ

市内の農家の女性らでつくる「まめっこの会」(中野多千子代表、会員11人)が食農教育の一環で、12月から来年1月にかけて、開催を希望する市内の各保育園を訪問し、「まめっこキッチン」を行っています。

メンバーらが栽培・収穫した大豆を使って、豆の特徴を分かりやすく学んでもらう講座や、実際に豆を使った手作り体験などを行っています。

12月10日には、さくら保育園の年中園児32人を対象に開催しました。大豆は、豆腐や納豆、味噌、しょう油などさまざまな食べ物や調味料に変化すると説明。また、大豆を石臼で挽いてきな粉を作ったり、きな粉のおはぎを作り、枝豆や黒豆茶と一緒に味わいました。園児らは笑顔でおはぎをほおばって「おいしい!」と声をあげ、皿に残ったきな粉もきれいにたいらげました。





12/12

## 地域での学びを通じ、自己肯定感を育む取り組みを

これからの地域における教育や学びについて世代や立場を超えて考える飛騨市教育フォーラム2021「まなびみらい会議」が古川町公民館などで開催されました。

講演会では、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の長田徹さんが講演しました。長田さんは、高い教育を受けていても、それが仕事につながらなかったり、無職の人の学歴が高く、自己肯定感が低いのが日本の若者の特徴だと説明。他県の事例を紹介し、「地域の大人と関わり、感謝されたり達成感を得ることで自己肯定感が育まれる」などと訴えました。他にパネルディスカッションや分科会もありました。

高校生のキャリア教育などに関わっている高山市の丸山純平さんは「長田さんの講演では、学びを得た高校生や住民の生の声が伝わってきて、自分の活動と重なる部分もあり、涙が出そうほど感動しました」と話してみえました。



12/16

## 子育て支援員を認定する「子育て支援員研修」の修了証授与

市では、子育て支援の担い手となる人材を育成するため、子育て支援の知識や技能等を習得するための「子育て支援員研修」を初めて開催し、約40人を支援員に認定しました。

この研修は、国の定めた科目を修了することで、子育て支援に必要な知識や技術等を習得するための全国共通の研修です。支援員認定後は、人材を必要とする地域型保育事業所やファミリーサポートセンターなどの子育て分野に従事することができます。これまでは飛騨地域外で研修を受講する必要があり、遠方での受講が難しいとの声が寄せられたことから、今年度始めて飛騨市で開催しました。

修了証を授与した都竹市長は「未満児保育の増加などもあり、保育の現場は人手不足が続き、子育て支援員の皆さんのサポートが不可欠。現場で全人的な保育をしていただければと願っています」と話されました。



12/20

## 飛騨牛繁殖研修センター「ひだキャトルステーション」内に研修生の学びや休憩の場として専用の研修室を整備

飛騨牛繁殖研修センター「ひだキャトルステーション」内に専用の研修室が完成し、そのお披露目がありました。

同センターにはこれまで専用の研修室がなく、研修生は施設事務所や吉城営農センター、市役所などで座学や休憩をしていました。そこで、空き部屋となっていた牛舎の一角を有効活用し、新たに研修室用に改修したものです。

研修室は、男女別の更衣室などを含めて10畳ほどのスペースで、壁面にはプロジェクターの投映もできるような壁紙を用いています。使用した長靴の汚れを落とせるよう水道なども備えました。研修生4人までの利用を想定しています。

現在、同施設で研修をしている鈴木愛生さんは「座学はやってきましたが、忘れていることも多く、現場で実際にやってみないとなかなか身につかないです。もう一度学びなおして頑張っていきたい」と話してみえました。

